

青丘文庫研究会 月報 No.252

2011年4月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセー>

パクサユさんのこと

斉藤正樹



● 私の友人に朴思柔 (パクサユ) さんという方がいます。彼女は韓国人で、韓国のニュース通信社の日本在住の記者です。彼女は病気でしばらくの間、京都府宇治市の朝鮮人集落ウトロに身を寄せていました。しかし、TVカメラを手に東北大震災直後の仙台に行き、彼女が接した現場のニュースを韓国に伝えていました。東京に戻ったというメールが来ました。以下は彼女の報告です。

1. 今回地震の被害を受けて、地盤沈下等、いつ倒れてもおかしくない状況になってしまった朝鮮人学校(ウリハッキョ)再建を心より祈っているいろんな方々が口座を聞いて下さっています。‘仙台銀行 八木山支店(普通)1891841 学校法人宮城朝鮮学園 理事長 金進弘’までをお願い致します。

2. さゆはいま東京です。止まらない咳等、皆様にご心配、迷惑ばかりになる一方でしたので、仙台まで一人で、支援活動のため来て下さった同胞の方が東京まで乗せて下さいました。この体は離れ離れになってしまいましたが、心はまだ仙台にあるようです。学校を守るために最善を尽くしている同胞や日本の市民の皆様を見習い、[コマプレス]も、学校再建のために頑張ってくださいと思います。

● 以下は今回[コマプレス]として仙台の同胞の方々を探しに行き、逆に助けられたさゆが、東北のソンセンニムやイルクンの方々へお贈りするラブレターです (もしどなたから転送されてお読みの方は、すべての文責はさゆ本人にあるし、このメールは記事でもリポートでもないのをご了承下さい)。

東北のソンセンニム・イルクンの方々へ

アンニョンハセヨ! オヌルド スゴマニハシヨツソヨ〜。

さゆはまだ東京です。東京は今日、かなりの日和でした。去る19日、女川の残酷な被害状況の上に皮肉にも続けられていた憎らしい位だった青空を思い出しました。

わんちゃんのお散歩に出かけた方々もよく見かけたし、ガソリンスタンドの前に並んだりする気配もなく、東京の方は日常生活に戻ったような気がするのです。しかし、いまだに2〜3人集まったら地震の話になるようです。百貨店なんかも18時に閉店するらしいです。原電爆発を恐れ、すべてを棄てて、沖縄まで避難し、‘東京の皆さん、速く逃げるだよ’とツイッターで呼びかけたという都民のお一人は、今頃東京にお戻りなれたのでしょうか

かね。

ウリハッキョを守るために、食堂に集まって、寝ていたりしたソンセンニム達！ 今日朝はお粥一握り、お昼は抜き、夕食はクツパ半分位の献立で、一日中頑張ってますか。さゆの体調ばかり心配せず、ソンセンニム達もくれぐれもご自愛お願い致します。

未曾有の大震災、と言われるほど、酷すぎた被害地でみた現実、テレビや新聞からみた光景や、災難映画の想像力を越えるものでした。40年もウリアイドウル(子ども達)を抱えてきた校舎が、いつ倒れるか知らない緊迫した状態になっているのにもかかわらず、東北の皆様は、始終笑顔で、素直で、コマプレスのように正体不明な余所者達はもちろん、いろんな所より訪れてきた方々を心から暖かく、接して下さいましたね。

校長ソンセンニム独特のキラースマイルには、やられないものはおりませんでした。校長ソンセンニムの前向きなその性格と、英語を専攻した人文学者らしい抜群の言語感覚を発揮‘大地は揺れても笑顔でいこう’とか、素晴らしいスローガンを次から次へ作り出し、笑顔とユーモア感覚のリーダーシップという天下無敵の指導者像を目の当たりにしました。愉快的リーダーシップって！ 爽やかそのものでした。

校長ソンセンニムが自ら軍手を着けて、体張って荷物を下ろしたり、運んだりする姿は、ウリハッキョでは日常茶飯事のようなこととは言え、さゆのように、南の権威的な教育風土で育ったものとしては、見るたびに驚きでした。さゆが南の方で学校を通った時代は恐らく校長ソンセンニムって大体男性。高級そうな靴はいつも光っていて、その靴のツルツルしたつま先で‘ハエが滑って死んだ’という噂が子どもの世界には説得力を持つくらい、かなり光っていました。極めて贅沢な‘校長室’はいつも鍵が。校長先生って常に不在中の存在。お客さんの接待には、必ずヒトを使う。

ウリハッキョのソンセンニムの方々が学生のために尽くすのは、ウリハッキョの業界では当たり前のことになってるようですが、余所者であるサユの目には驚きの連続でした。スニーカーでハシゴを持って学校のあちらこちらを走り回ってる校長ソンセンニム、地域によってその次はスクールバスの運転！ 街の一角で、そのバスを乗って帰るウリハッキョの子ども達を見かける度にほんとと安心するというか癒やされてます。

先週卒業式の前、国語ソンセンニムは‘卒業生5人にプレゼントしたい’と、バインダーを5個買って、その表紙として丁寧にチマチ・ヨゴリを折り紙で作って、貼っていましたよね。

その彩りや、完成度の高さにあまり驚いたさゆが、いいな～いいな～と目を離さなかったら、‘ごめんなさい、今は材料がこれしかなく、5個しか作れないけど、今度また材料が手に入れたら作ってあげるから’と、宥めてくれましたね。止まらない咳を連発しても、誰一人、嫌な顔をみせてくれなかった東北のウリ同胞の方々。皆様1日2食で耐えながらも、薬を呑むためには、三食を食べなきゃと、さゆだけには必ず1日3食と、忘れずにお湯を魔法瓶に2つも入れてくれましたよね。

‘結核の可能性が極めて高い。仙台入って動いた場所や今この部屋も消毒する’と医者先生から聞いてからも何のこともなかったように相変わらず笑顔で、心配して下さいましたね。気で健康な東北ウリハッキョの皆様エネルギーをいただいて、さゆは、精神的にも体力的にも益々健康になって行く気がします。

取り急ぎ東京より。さゆ拝。

小さい声、低い視線。コマプレス

- 検査の結果、彼女の結核の疑いは晴れたようです。しかし、何やらこのまま彼女は燃え尽きてしまうのではないかと……。ある種の覚悟がその言葉から伝わって来るようで、私はとても不安です。おそろしいです。

第324回在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (2011.2.13)

戦前期大阪における朝鮮人医療問題

－慈恵的救済と大阪朝鮮無産者診療所を中心として－

塚崎昌之



戦前期の日本における朝鮮人の医療問題については、外村大の論稿以外にほとんど研究がないといっている。朝鮮人たちは渡来初期の1910年代から、「親睦・融和」団体を作り始めるが、その最大の目的は、疾病などの事故が起こったときに相互扶助を行うための機関であった。

1920年半ば前から朝鮮人医療問題への取り組みが始まる。朝鮮人協会などの朝鮮人団体も無料診療・病院建設などの医療計画を持つようになるが、費用・人材等の面で実現することはできなかった。本格的に取り組んだのは、内鮮協和会と大阪毎日新聞慈善団であった。ともに、朝鮮人通訳を使い、日本人医師の下で無料診療を開始した。その他にも、方面委員から無料診察券を得て、済生会病院、慈恵病院などで診療を受けることも可能であった。1930年に内鮮協和会の診療所を利用した在阪朝鮮人は5%強であり、無料診察を受けた割合は日本人の倍程度あったと推測される。様々な限界があるにしても、一定の条件下ではセイフティ・ネットとしての役割を果たしていたともいえる。しかし、その「救済」は慈恵的なものでしかなく、朝鮮人たちの生活問題の根本的な解決にはいたらなかった。

1920年代末、無産政党間で医療問題に対する関心が高まり、大阪でも「左右」の協力で大阪無産者病院設立の動きが始まる。在阪朝鮮人の間でも、その刺激と大阪最初の朝鮮人医師鄭求忠が現れたこともあり、朝鮮人団体の大同団結的な運動を背景に、朝鮮人による朝鮮人のための実費診療所設立計画が立てられ、1931年2月に大阪朝鮮無産者診療所が開業した。当初は無産政党中道・右派系と同様の性格を持った診療所と見られていた。

この経営に携わった実行委員会には、大きく三つのグループがあった。一つは鄭求忠をはじめとした民族主義者、キリスト教信者のグループであり、当初は彼らが運営の中心であった。一つは思想的には共産主義者に近いが、当時の在日労総の全協への解消、一国一共産党の方針には距離を置き、朝鮮人の大衆運動を重視すべきだと考えていた金達桓らのグループであり、もう一人の朝鮮人医師閔璣鎬はおそらくこの立場に近かったと思われる。そして、もう一つのグループが文昌来などの当時のコミンテルン等の方針に忠実なグループであった。彼らは在日労総の解体過程で組合員を急速に減らし、生活問題を通じて組織の立て直しを図っていた。その策動の一環として、無産者診療所を自分たちのヘゲモニー下に置くことを画策し始め、開業直後から民族主義者、社民主義者への攻撃を強め始めた。1931年8月に行われた診療所第二回定期大会で、鄭求忠ら民族主義者を排除し、実行委員長には文昌来が就任、共産党系の大阪無産者病院設立実行委員会に加盟することになった。この時点では金達桓らのグループはまだ組織内に止まっていた。

しかし、その組織的な混乱は警察に弾圧の口実を与え、9月に診療所は閉鎖に追い込まれた。その事後対策を協議する拡大常任委員会では、民族的対立を助長する診療所を閉鎖し、その財産を共産党系の診療所に与え、その指導の下に分院を作るという共産党系の方針を巡って紛糾した。ひとまず実行委員会を解体し、財産管理委員を選出し、診療所の再建に準備を図るという案が可決された。しかし、再建は容易ではなく、1932年1月の大阪無産者診療所拡大管理委員会で、朝鮮人の医師、「看護婦」のいる分院を東成区、西成区に設置することを条件に、全財産が無産者医療同盟（大阪無産者病院設立実行委員会などが全国組織に拡大した組織）に「寄贈」されることになった。その「財産」を基礎に1933年7月に大阪無産者東成診療所が開院した。朝鮮人医師はいなかったものの、「看護婦」には金文準の娘らが就いたといわ

れ、他の診療所が長続きしなかった中、1937年12月まで存続した。

朝鮮人が主体となって創設された相互扶助的医療機関が簡単に瓦解した原因は、権力の弾圧はあったにしろ、朝鮮人たちの内部分裂、特に共産党系の運動方針に基づいた党派的な策動を抜きにしては考えられない。

朝鮮人による医療機関は崩壊したが、その重要性の認識は広まっていた。朝鮮人協会などが再び診療所設立計画を立てたが実現しなかった。内鮮協和会も新病院建設計画を立てたが、診療所の拡充に止まった。1930年代半ばからは朝鮮人医師の数が少しずつ増え、自らの医院を持ち、朝鮮人対象の医療を行っていた。その一方で、1934年に大阪府内鮮融和事業調査会が発足し、朝鮮人「同化」政策が本格化するが、調査会では朝鮮人独自の医療問題は重視されず、日本人用の社会事業施設を利用させる方針に転換していった。

その他、「偽医者」、モルヒネ注射による治療、巫俗・民間療法、漢方薬治療なども、初期の段階から広く朝鮮人の医療問題に大きく関わっていたが、強権的な取締りが行われたモルヒネ以外は1930年代後半まで広く続いていたことは、朝鮮人医療問題の解決が進んでいなかったことの証左にもなる。

●青丘文庫研究会のご案内●

■第325回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

4月10日(日) 午後3時～5時

「鶴橋キョンチャル・アパートの建物について」

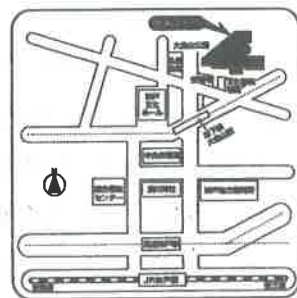
足代健二郎・坂本悠一

■第280回・朝鮮近現代史研究会

4月10日(日) 午後1時～3時

「2010年 韓国・朝鮮問題に関する日本の新聞社説」 梶居住広

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

2011年5月8日(日)、在日(李裕淑)、近現代史(佐野通夫)、6月12日(日)、在日(太田修)、近現代史(未定)、7月10日(日)在日(高野昭雄)、近現代史(未定)、8月は休みです。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。



【月報の巻頭エッセイの予定】

5月号以降は、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- ・ 未曾有の東日本大震災が襲いました。地震、津波に加えて原発ですから本当に被災地は大変だと思います。被害にあわれたみなさまに心からのお見舞いを申し上げます。神戸学生青年センターでは毎年の古本市の売り上げから今年は100万円を被災地の被災留学生・就学生支援活動に届けます。
- ・ 「花冷え」というのでしょうか、寒い日が続いています。きょう(4/5)あたりから春らしい春になると言われていますが……。 (飛田雄一 hida@ksyc.jp)